群教セ	G11 － 02
	平18.235集

家庭との連携をはかる進路指導の工夫
― 保護者をまきこむキャリアガイダンスを通して ―

特別研修員　　矢島　敏明　　（高崎市立箕郷中学校）

《研究の概要》

本研究は、中学３年生が進路選択を考える時期において、従来とは形式を変え、家庭との連携をはかる進路指導の工夫である。計画的なキャリアガイダンスをすすめる中で、保護者に対して広い視野をもつための有効なヒントを与えることにより、親子で将来を見据えて進路を考えたり、話し合いをする機会を増やすことができ、その結果将来設計に関する生徒と保護者の共同作業をうながすことができることを明らかにしたものである。

Ⅰ　主題設定の理由

４月に中学３年生に対する進路希望調査を行うと、具体的な高校名を書ける生徒が多い。しかし、その高校を選択をした理由について、明確に説明できる生徒はごくわずかである。このような生徒のイメージだけで進路選択をすすめるのではなく、高校の教育課程や授業内容をはじめ、学校生活や部活動などの情報を入手し吟味したうえで、自らの将来を見据えた高校選択をすることが望ましいと考える。

また、進路を決定する過程では保護者と生徒との関係がとても重要であるにもかかわらず、両者の意志の疎通がなかなか行えないケースが多く、お互いが納得できる選択をすることが難しくなっている。

そこで、親子で将来や進路にかかわる話し合いができるようにするためには、例年通りに行われている進路集会を工夫する必要がある。まず「高校理解度アンケート」から生徒が高校の情報を多く知らないという事実を確認し、現実の不安感から高校見学会に参加しなくてはという気持ちを持たせる。次に、学年全体の集会として全員に対して行う形式ではなく、入試をキーワードにした「イブニング講座」と名づけた学習会を開講する。これにより目先の受験だけでなく、３年後の高校卒業時や７年後の大学卒業時の就職までを見通した高校選択が重要なことを、出席した保護者や生徒に意識づけることができる。さらに、「将来設計プランシート」を用いて、生徒が自分の進む方向を意識したり、職業に到達する間には幅広い選択肢があることを確認するとともに、保護者にも生徒の記入事項を見てから意見を記入してもらい、互いの考えを交流させる機会をつくる。こういった一連のキャリアガイダンスを通して、家庭における進路の話し合いが活発に行われる状況をつくりだせば、生徒だけでなく保護者をまきこむことができ、将来設計の共同作業をうながすことができると考え本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

中学３年生が進路を選択する時期におこなわれる進路ガイダンスを工夫することにより、生徒や保護者が進路にかかわる話し合いの機会を増やすことができ、保護者を交えての将来を見据えた高校選択が行えるようになることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

１　キャリアガイダンスとして「イブニング講座」を行うことで、親子が高校の選択や進路に必要な情報を具体的に得ることができ、将来を見通した進路設計に関する家庭での話合いの機会を持てるようになるであろう。

２　「将来設計プランシート」を活用することで、将来に向けた目標やこれからの高校選択などの方向性を決める生徒の思考過程を助けたり、生徒の意志を保護者に伝えるができるので、親子で進路について考える場面をつくることができるとともに、話し合いを深めることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　進路集会について

本稿では中学生や保護者に対しておこなう従来型の進路にかかわる説明等の一斉集会のことである。この集会では、中学卒業後の上級学校の種類、国立や公立や私立の区分、私立高校入試の種類、公立高校入試の種類、入試の実施時期などの情報を伝えることが目的である。

(2)　キャリアガイダンスについて

中学生が卒業後の進路を考える場面で、生徒や保護者に対して教師が助言や案内を行うものである。ここでは、高校に合格するためだけの受験指導ではなく、生徒の特性をふまえて将来の職業までを見通し、幅広い視野を持った上での進路選択をうながすことを目的としている。具体的には、以下のアおよびイを指す。

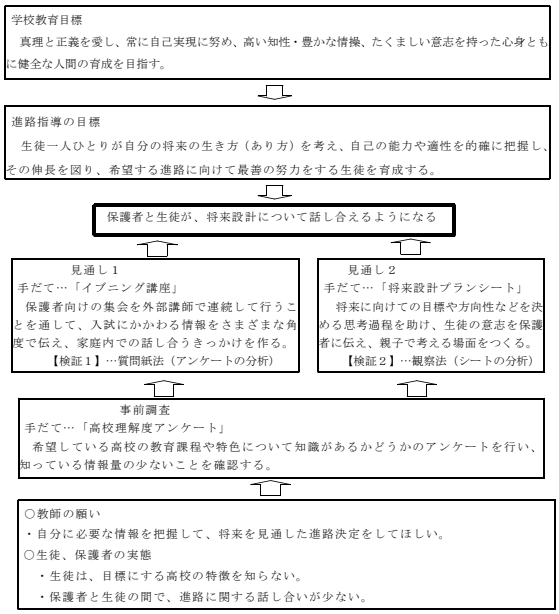
ア　「イブニング講座」について

進路説明会で保護者から出された質問や、もっと詳しく聞きたいという要望に応えるための学習会である。講演内容や開催時間帯、講演時間に配慮し、保護者が出席しやすいように工夫する。従来の高校受験の説明会とは異質のものであり、内容は高校生活や高校卒業後および大学卒業後の就職にかかわることにまでおよび、将来を見通した高校の選択が必要であることに気付かせようとするものである。

イ　「将来設計プランシート」について

進路ガイダンス、高校案内パンフレット、体験入学、「イブニング講座」などから得た情報をもとに、希望する高校名や学科から将来の職業を選択していく生徒の思考過程を助けるための学習プリントである。生徒本人の意志だけでなく、保護者の意見も書き加えることができるため、家庭での話し合いの材料に使うものである。

(3)　全体構想図



2　実践の概要および結果と考察

(1)　事前調査

本研究の前に生徒の実態を把握することを目的とした「高校理解度アンケート」を行った。この調査を行うことで、生徒は高校の教育課程や特徴についての知識や情報が少ないことに気づくであろう。その結果、情報を詳しく調べたり、高校見学会に参加して情報を集めたいという気持ちを生徒に持たせることができる。

ア　調査の概要

６月中旬に各自が目標に挙げた希望校について、「高校理解度アンケート」の調査を行った。調査項目は志望校の特徴、学年のクラス数、授業時間、補習の有無、通学方法と時間、進路状況、資格取得、盛んな部活などについての知識があるかどうかである。回答方法は、質問に対して４つの選択肢（わかる・ややわかる・ややわからない・わからない）から選び、さらに知っている内容を記述させる方法である。

イ　調査結果と考察

志望校の特徴については、「わかる、ややわかる」に回答する生徒が38％になっており、理解度が高いように見えがちである。しかし、わかると答えた工業高校志望の生徒も、「工業が盛んである」とか「給食が行われている」といったレベルにとどまっており、数値の割に学科としての特徴がとらえられているとは言えない。また、学年のクラス数や補習の有無、卒業後の進路、資格取得

について、80％の生徒が「わからない、ややわからない」と答えている。

通学の方法では、90％の生徒が「わかる、ややわかる」と答えているが、通学時間になると60％の生徒が「わからない、ややわからない」と答えるなど、漠然としたイメージだけで考えており、現実的なとらえ方になっていないと言える。ただ単に通学距離が短いというだけで選択してしまい、学校としての特徴をほとんどとらえないで決定していると考えられる。

また、高校卒業後の進学や就職といった進路状況に、目が向けられていないことも浮き彫りになった。部活動についての関心は高く、自分がどんな部に入部するかを決めている生徒が多くいて、部活動が盛んな本中学校の特徴が表れているとみられる。

資料１に示した感想をうけて、自分の持っている高校の情報量の少なさを実感させ、不安や危機感から調べようとする気持ちを持たせるために、後日、学年集会で「アンケートの集計をみると、今の段階で高校についての情報が集められていない。今は単なるイメージだけで高校選択をしている。本当にそれでいいのか。」と投げかけた。

資料１　アンケート調査後の感想

- 自分は高校について何もわかっていなかった。だからもっと調べてよく知ろうと思った。志望校がちゃんと決まっていないから早く決めようと思った。
- 意外と知らなくて、少しショックだった。もう少し調べたりして、今後に生かしたい。
- 今、志望している高校が本当にここ！っていう気持ちではないので、何ともいえないが、わからないことがありすぎるなと思った。
- わからないことが多くて、もっと調べてその学校の特徴をよく知り、高校のことについて詳しく知っていきたいと思った。

さらに、すでに高校見学会に参加したＡ子の例（資料２）を使い、見学会に参加することで詳しい内容がわかるという情報入手の１つの方法を示した。さらに、入学試験の面接において高校の印象を質問されることが多く、実際に足を運んで自分の目で見てくることがとても重要であることから、「今後、高校見学に２校は必ず行き、違いを実感しよう。」と伝えた。

資料２　Ａ子の例 一部抜粋

高校理解度アンケート　3年[redacted]組[redacted]番　氏名[redacted]

それぞれの質問に対して、ア～エの記号を○で選び、知っている内容を［　］に書きましょう。

志望校編　あなたが志望している高校について答えましょう。

志望校名（[redacted]）

①あなたの志望している高校は、どんな特徴がありますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない

②１学年は、何クラスありますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
入ってきた人数で変わる

③授業は、何分間で、何校時までありますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
50分間　6校時

④朝や放課後、土曜日の補習はありますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
特進クラスはある

⑤通学する場合の方法は何ですか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
バス・歩き

⑥⑤の時間はおよそ何分ぐらいかかりますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
25分間

⑦高校卒業後の進路は、「大学や短大進学、専門学校進学、就職」に分けるとそれぞれ何％ぐらいですか
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない

大学や短大	専門学校	就職
％	％	％

⑧どんな資格が取れますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない

⑨　⑧は、進学や就職にどんなふうに有利になりますか
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
高大に入りやすくなる

⑩部活動は、どんな部が盛んですか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない

⑪あなたは何部に入りますか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない
バドミントン

⑫校則はどの程度きびしいですか。
ア わかる　イ ややわかる　ウ ややわからない　エ わからない

今回のアンケートは、夏休み中に行われる高校見学会の申込みが始まる時期と重なるため、高校見学会に参加する意欲づけとして効果があったと考える。アンケートの質問項目を通して、高校を知る上での重要情報が何であるかが明確になった。また、見学会を済ませた生徒の情報量の多さを例にあげることで、多くの生徒が知識や情報の少ないことに対して漠然とした不安感は与えられたが、そのような状況に対する危機感を持たせるところまではいかなかった。今回、アンケートは生徒に返却したが、生徒が情報を知らないという事実を保護者にもわかってもらうためには、保護者に返却する方法がより効果をもたらしたと考えられる。

これらのデータを基に以下の見通し１，見通し２の計画を立てた。

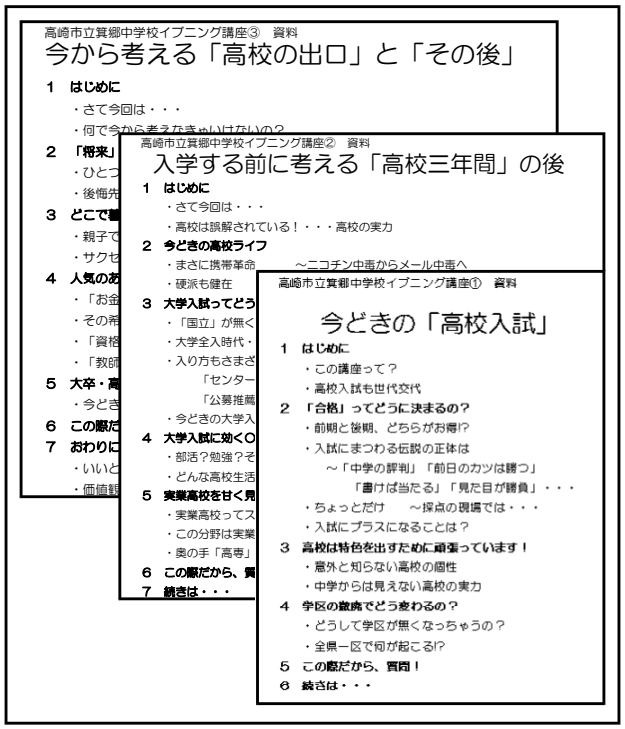
(2)　キャリアガイダンスとして「イブニング講座」を行うことで、親子が高校の選択や進路に必要な情報を具体的に得ることができ、将来を見通した進路設計に関する家庭での話合いの機会を持てるようになったか（見通し1）

ア　実践の概要

進路説明会において実施した保護者に対するアンケートの結果から、高校入試にかかわることだけでなく、高校生活や高校卒業後の大学や就職などを含めた話を聞きたいという要望が出た。それに応えるための学習会を開催する方法を工夫し、参加した保護者や生徒が家庭で話し合いをもつきっかけになったかどうかを確かめるものである。９月に保護者や中学３年生の希望者を対象とし

て、資料３のように入試をキーワードにした講座を合計で３回計画した。連続性を持たせることで、意識づけの効果をねらった。１回１時間で各回ご

資料３　イブニング講座のレジュメ



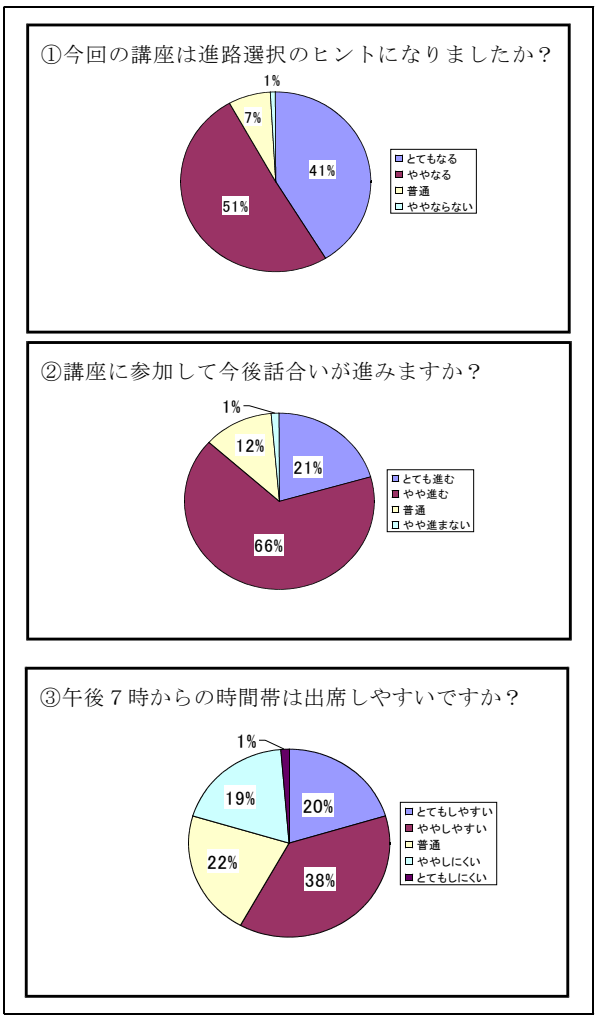
との完結とし、また夕方の時間帯に開催することで働いている保護者が出席しやすいように配慮した。全てに参加しなくても、興味のある回だけに参加できればよいことを呼びかけていき、保護者の負担感を軽減した。

イ　結果と考察

参加した保護者および生徒の感想や、実施後のアンケート調査結果(資料４)から、進路選択のヒントになったり、情報を得たいという保護者の要望に応えることができ、家庭での話し合いを進めるきっかけをつくることができたと考えられる。

学習会の持ち方については、午後７時からの開催に対して半数以上が出席しやすいと感じており、その結果参加をうながすことができた。開催の曜日をずらしたことについての効果は特にないとみられる。１時間という講座の時間はちょうどよい長さだと感じた。また、生徒が一緒に参加できる形式をよいと感じた。これは、ふだん家庭においても保護者と生徒が話をする機会を持ちにくい現実があり、保護者から生徒へ内容を伝えにくいという背景が考えられる。

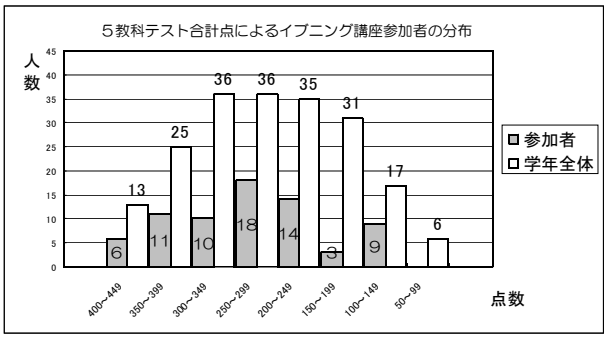
資料４



参加した理由の優先順位は、１番目はテーマ、２番目は外部講師、３番目に時間帯、４番目に希望制の参加となっていた。これは講座のテーマが、高校での生活や大学入試、さらに就職となっていることと、実際の体験をもとに話ができる高校教師を外部講師にしたことが、大きく影響していると思える。「イブニング講座」の実施時期は、生徒が３年生の４、５月ごろがよいという要望結果となり、保護者はある程度早い時期におこなうのがよいと考えていた。

また、資料５のように参加した保護者は生徒の

資料５



実力テストの点数の層でみるとほぼ全体に散らばっていることから、進路に対して不安を持ったり進路の情報を得たいと考えるのは、ある特定の層ではないことがわかった。

以上のことより、保護者の興味・関心を集め、参加をうながすキャリアガイダンスの持ち方は、次のようにまとめられる。①テーマは、高校入試だけでなく高校生活や大学入試、さらに就職までを考えた先を見通した内容にする。②講師は、専門的な話のできる外部講師だと説得力が高まる。③開催する時間帯は夕方７時以降で、長さは１時間程度にする。④保護者だけでなく、生徒も一緒に参加できる形式とする。⑤参加を義務化しないで希望者が参加できる形式にすると、意欲のある人が集まるので会場の雰囲気が高まる。

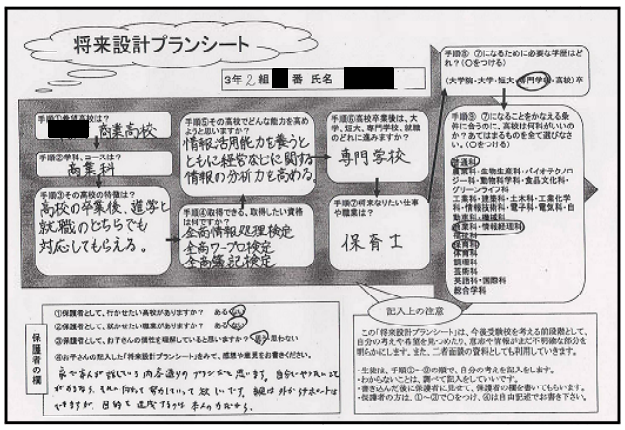
また、レジュメを事前に配布することで参加をうながしたり、あらかじめ話して欲しいことや聞きたい内容を出欠席の把握と合わせてアンケートとしてとっておき、講師から回答がもらえると知らせておくと、一方通行の講義ではなくなるため、雰囲気のやわらかいものになる。

(3) 「将来設計プランシート」を活用することで、将来に向けた目標やこれからの高校選択などの方向性などを決める生徒の思考過程を助けたり、生徒の意志を保護者に伝えることができるので、親子で進路について考える場面をつくることができるとともに、話し合いを深めることができたか（見通し2）

ア　実践の概要

10月上旬に、受験校を考える前段階として、将来の希望や方向性を明らかにするために資料６のような学習シートを実施した。

資料6　将来設計プランシート記入例



生徒の希望する高校名から、学科やコース名などを手順に合わせて書き込ませた。これは、生徒が自分自身を見つめたり、考え方を手助けする流れになっており、書けない部分があればそこが不明確な所であると同時に、本人が意識しなければならない事を示すことになる。これは、将来なりたい仕事や職業をかなえるのは、１つの高校に限られているわけではなく、たくさんの高校や学科からの進路も可能であるという、選択には幅があるということに気づかせるものである。

保護者として行かせたい高校や、就かせたい職業があるかどうか、またその願いは子供の適性を踏まえているかどうかという点についても、保護者自身が再確認できるものになっている。さらにこのシートは、この後に実施した面談の資料としても使用した。

イ　結果と考察

希望高校の特徴は、ほとんどの生徒が記入できており、当初の「高校理解度アンケート」の時点ではわからないと答えていた生徒も、その後の活動からおおよその特色をつかむことができたと考えられる。高校で高めたい能力については、普通科を選んだ生徒の多くが未記入であったり大学に合格する力と書くにとどまり、具体的な内容は書きにくいようである。実業高校を選択した生徒の方が専門性や就職を前提に考えているためか、資格や社会で要求される能力についてはっきりと書くことができていた。将来なりたい職業を意識している生徒は60％で、残りの生徒は未定となっており、未定の生徒は、必要になる学歴欄や、条件に合う学科を選ぶ項目欄が空欄になっていた。初めに選んだ学科以外に印がつけられたのは35％にとどまり、例えば医師ならば普通科以外に選びにくいが、他の職業であれば条件に合う学科がたくさんあるということに、生徒はあまり気づかなかった。そこで、将来なりたい職業に就くために、高校の学科選択にはたくさんの選択肢があることについて、担任から二者面談の際に助言をしてもらうことにした。

保護者欄では、行かせたい高校がある保護者は70％にのぼったが、就かせたい職業がある保護者は40％にとどまっていた。コメントには生徒の考えを尊重する内容が多く書き込まれていて、高校で自分に合う職業を探してほしいとか、これから生徒と一緒に考えてアドバイスをしていきたいという積極的な保護者もみられた。このことから、保護者も目の前の受験のことは気にかけているが、将来のことまでは考えていない保護者も多いことが推測できる。

シートは、生徒が記入してから保護者に見ても

らい保護者欄に書き込んでもらう手順にしたが、これは、話し合いながらだと保護者の意向だけになってしまうことを防ぐねらいがあった。本人の考えを明確にする上でこの書き込む手順は重要である。進路選択の思考過程を手順に従って書き込む形式だと、今まではっきりと意識化していなかった生徒でも、進路の方向性を決めることに効果的であったと考えられる。このシートを使い保護者と生徒の考えが整理されることで、受験校を決定していく過程で、進路の話題が家庭で取り上げられやすくなったといえる。

Ⅴ　研究のまとめと課題

1　研究のまとめ

現在の中学校での進路指導では、なりたい職業から志望校をしぼっていく方法をとっているが、生徒が就きたい職業や保護者が就かせたい職業が、漠然としているため具体的なイメージを持たせるのには難しい面がある。

中学生が進路選択を考える時期において、キャリアガイダンスを用いることは、家庭での進路に関する会話を増やすという点で大変効果があり、結果として親子での話し合いを深めることができた。中学３年生が将来設計をすることは難しい。そこで、保護者が相談相手になり、時間をかけて話し合うことが大切なのである。時間をかけることで、お互いの思考が整理され、解決の糸口を探れるようになる。高校選択は、その時点での生徒の興味・関心を中心に考えるものであるが、大人の価値観や家庭の事情を含めて検討していくことも大切であるということがわかった。

ほとんどの保護者は、高校入試に対して不安を持っていて、入試にかかわる情報を手に入れたいと考えている。このニーズに対応する講座を開講することは、保護者が持つ進路に対しての不安を取り除いたり、幅の広い見識を持つことにつながっていく。こういった条件を整えていくことで、保護者と生徒が一緒に考える場面が家庭でできていくのではないかと考えられる。

2　今後の課題

中学２年生の学年末に行う上級学校調べは、学校案内やWebページを使って学習しているが、生徒の印象に残るものになっていなかった。そのため中学３年生になり、いざ希望校を考えようとしたときに選択した理由がはっきり出てこない。この現状を解決するには、上級学校調べの学習をより深いものにする必要がある。例えば１つの高校を調べているが、２校以上を比較するような活動から高校の特色をとらえさせる。それを３年生での高校見学会で確認する活動につなげていくと効果が上がるのではないだろうか。

また、「イブニング講座」の実施時期を３年生の４月頃にという要望が多かったが、その時点では生徒の考えがまだ浅い状態である。部活動をしていた生徒が引退後、ようやく受験を意識しはじめるが、まだ何も手につかず、保護者も何も始めない子供を見て不安を感じ始める夏休みの後半が、講座を開催するのにちょうどよい時期ではないだろうか。本研究のように「イブニング講座」が９月末の終了になると、「将来設計プランシート」の作成時期と受験校を絞り始める時期が近くなりすぎてしまい、落ち着いて考えることができなくなってしまうのではないかと考えられる。目の前の受験をあまり意識させない時点で、「将来設計プランシート」に取り組ませる方が家庭での話合いが深まると考えられる。

（担当指導主事　中西　信之）

Ｗｅｂ検索キーワード
【進路指導　進路選択　保護者　キャリアガイダンス　将来設計】

＜参考文献＞

・群馬県教育研究所連盟　編　『実践的研究のすすめ方創意工夫を生かした教育を求めて』　東洋館出版社(2001)
・群馬県総合教育センター　編　『体験型の子育て学習プログラム15　来てよかったと喜ばれる新しい保護者会』　図書文化社(2006)
・玄田　有史　著　『14歳からの仕事道』　理論社(2005)
・鳥居　徹也　著　『フリーター・ニートになる前に読む本』　三笠書房(2005)
・三村　隆男　著　『キャリア教育入門　その理論と実践のために』　実業之日本社(2004)